ウパニシャッドの生気説

中祖一誠

古ウパニシャッド文献を特徴づける思想的主題が、個人または宇宙に関する主体的原理の探求にあつたことは周く知られている事柄である。もちろん、その中にはヴェーダ以来の祭式主義やブラーフマナに見られる煩雑な神学的思弁の片鱗を留めているとはいいながらも、宇宙の根源の探求と人間の主体原理に関する真摯な思索が十分に認められる。このような傾向は、後代の学派哲学のように必ずしも整備された思想体系として整えられてはいなくて、概して直観的洞察による提示や寓話的もしくは神話的構想のもとに、一見無秩序とも思えるような形で語られている。しかし、ウパニシャッド文献全般に亘つてその内容を検討してみるとき、すでに単なる寓話や神話的思弁の枠に納まりきらない抽象的思弁を認めることができる。そのもつとも典型的なものが宇宙原理たる梵(brahman)と人間の主体原理たる我(ātman)との合一をもつて知られる梵我同一説であるということができよう。この梵我同一説の宇宙原理たる梵は暫く擱いて、人間の主体原理を意味するものとして我々は ātman・puruṣa・prāṇa などの原理をウパニシャッド文献に見出すことができる。しかし、人間の主体原理探求という存在論的・認識論的性格を濃厚に帯びているウパニシャッド思想においては、生理的器官や個体としての人間の意味をもつ prāṇa や puruṣa よりも抽象的色彩の強い ātman がより適わしく、随所に梵と同置されてウパニシャッド思想形成の主役を果している。この事からややもすれば梵我同一説が存在論的または認識論的な aspect でのみ捉えられ、ウパニシャッド思想の正しい理解が遮られているように思われる節がある。そこで、同じく主体原理として用いられていながらも、ātman ほどには普遍性をもつていない prāṇa の考察を通して梵我同一説の意味を検討してみたい。

元来、「prāṇa」という語は「気息」、「呼吸」などの意をもつが、リグ・ヴェーダ時代の「asu」に替つて、すでにブラーフマナの時代に台頭してきた語である。ブラーフマナで

は、「人眠れば語は気息（prāṇa）に入り、……（順次に）耳・意・眼等も気息に入る。覚めれば再び気息より生ず」[1]と述べられているように、prāṇa はすでに諸感覚器官の主体、統括者として認められている。また五風説（いわゆる Vital airs）における中心原理としても示されている。[2]このように prāṇa が単に呼吸、気息という具体的な身体的現象を意味するのみに留まらず、他の諸感覚器官ないし五気息の統括者として意識されていたことは、古代インドの思想家の関心が自己の内面に向つていつた最初の過程を示すものであり、一種の生命原理とも見られるものを素朴な仕方ではあるが追求していたといえる。古ウパニシャッドに現われる prāṇa の記述は類別して次の四つの場合が挙げられる。すなわち、感覚器官の主宰者としての prāṇa（一）、五気息の統括者としての prāṇa（二）、叡智・認識主体としての prāṇa（三）および最高実在としての prāṇa（四）である。第一の感覚器官の主宰者としての prāṇa は、前述の如くブラーフマナにも見られ、古ウパニシャッド固有のものではないが、多くの場合感覚器官の優劣争いの寓話の形式で語られる。すなわち、語（vāc）、眼（cakṣus）、耳（śrotra）、意（manas）および生気（prāṇa）がそれぞれ自己の機能の優越性について争い、一つずつ身体から去つて身体が最も危くなるものが最も優れたものであるとして、他の諸感覚器官が prāṇa を主宰者として証認したと説いている。[3]また、別の箇所では、他の感覚器官が死に捕捉されたにも拘らず、prāṇa のみは捕捉されなかつたということも説かれている。[4]これらの記述から推して、prāṇa が本来帯びている「呼吸・気息」の意味をもちながらも、諸感覚器官の主宰者の役割を有していたということができる。第二に、五気息の統括者としての prāṇa についてウパニシャッドの記述は、「この心臓内は五つの神門がある。その東の門は吸気（prāṇa）であり、眼であり、太陽である。これを光明（tejas）とし食（anna）として崇信（upās）せよ。かくの如く知るものは光輝あり、食物に充てるものになる。[5]」と述べ、順次に体気（vyāna）―耳―月、呼気（apāna）―語―火、腹気（samāna）―意―雨、上気（udāna）―風―虚空の如く同一の対応形式で述べられる。ここで我々は新しい問題に遭遇する。これはウパニシャッド思想を特徴づける、いわゆる宇宙的事象と個人的事象との対応形式である。この対応の結びつきは甚だ任意的であつて、ここに論理的必然性を認めることは困難である。むしろ、心理的な選択に基づくものと解すべきである。しかし、個々の結びつきそのものよりも、この五気息と宇宙事象（太陽・月等）の対応を通して個人の主体的存在を自己の意識の中に表象しようとする意図に注目すべきである。主体的存在を意識することは、現実には外界の統一的な支配という形をとる以外に道はない。この対応形式はこの

ような aspect で把握される必要がある。従つて、たとえば「世界を充たす自然界の雑多なる現象がバラモンの手によつて組織立てられ始めた[6]」ということではなく、個人の主体原理を把握することの必要性に触発されて宇宙事象との対応形式が提示されたと考えるべきであろう。すなわち、ウパニシャッド思想家の関心は外界自体の対象的認識にあつたのではなく、自己の内面的な生命原理ないし主体原理の把握にあつたのである。第三に、認識主体としての prāṇa が詳説される箇所として、我々はカウシータキ・ウパニシャッドのインドラ神より伝授される生気論を取り挙げることができる。この箇所は生気についての纏まつた記述として重要な意味をもつ。「われは prāṇa である。叡智我（prajñātman）として、生命として、不死としてこれを崇信（upās）せよ。生命は prāṇa である。prāṇa は生命である。不死である。この身体に prāṇa がある限り生命がある。人は prāṇa によつてこの世で不死を得ることができる。」さらにまた「語はかの叡智の部分が抽出されたものであり、名はそれが外界に存在の要素として置かれたものである。……語を理解することを止めよ。宜しく語の語り手を知るべきである。香を理解することを止めよ。宜しく香の嗅ぎ手を知るべきである……これらの十の存在要素（bhūtamātra＝語・香等）は叡智と対応している。また叡智要素は存在要素に対応する。存在要素がなければ叡知要素はなく、叡智要素がなければ存在要素もない。……存在要素は叡智要素に支えられ、叡智要素は prāṇa に支えられている。この prāṇa こそは叡智我であつて歓喜・不老・不死である。」このように prāṇa は叡智我として規定され、ātman と同置されている。ここに示される prāṇa はもはや前述の感覚器官や五気息の主宰者としての prāṇa と同位相に位するものではなく、十分に主体原理の資格をもつもの考えてよい。ただ、この認識主体としての prāṇa が説かれているのがカウシータキ・ウパニシャッドに限られていることから、このウパニシャッドの成立事情が他のウパニシャッドと異なることを想像させる。最後に、最高実在としての prāṇa については、我々はかのサナットクマーラ王の教説に注目すべきである。バラモンのナーラダが自己の学問の内容が聖頌識り（mantra-vit）であつて自我識り（ātma-vit）に非ざることを歎き、サ王に伝授を乞う。これに対してサ王の説いたものが prāṇa である。すなわち、ナーラダの学んだものが単に名称（nāman）に過ぎないことを指摘して、次第により高い原理を示して、順次に語・意・思惟・心……と取り出し最後に prāṇa を提示して、「prāṇa は実に一切に外ならないこのように観察し、思慮し、識るものは問答の勝者になる[9]」ことを教えている。また、神格についてシャーカリヤがヤージュナヴァルキャに発した質問に対して、かれは神格を古来認め

られている三三〇六柱の神より順次その数を減じていき、二神（食・生気）・一神半（風）と示し、最後に prāṇa を一神として提出する。そして、この一神こそ梵であると教える。[10] ここにおいても prāṇa は ātman と全く同価値なものとして最高の主体原理として示される。このような「prāṇa は梵である」という端的な提示は必ずしも多くは見出せないのであるが、一方で「prāṇa は梵である」という説は誤りであると批判する箇所があることと合せ考えると、ウパニシャッド思想家の中に主体原理を生気（prāṇa）とするブラーナー論者がアートマン論者とともに併存したと考えることができよう。ブラーナ論は、もちろんアートマン論ほどには普遍性はもち得なかつたであろうが、とにかくウパニシャッド思想の中で一つの思想的勢力を有していたと思われる。それにしても、ここに示される「生気は梵である」という命題は、も早感覚器官の主宰者や気息の統括者の域を超えた抽象原理であり、個人の主体原理の探求に沈潜していつたウパニシャッド思想家の深い意識体験の表現として理解されるべきであろう。

以上、ウパニシャッドに現われる prāṇa を検討したわけであるが、ātman がウパニシャッドの中では多く創造神話の形式の第一原因的な抽象原理としての性格が濃厚であるのに対して、prāṇa はそれ自体が本来具有している感覚器官としての性格が常に纒いついている。そして、ātman の創造神話に対して、prāṇa は感覚器官の優劣争いの寓話形式で語られ、生命原理として性格が強い。しかし、このような prāṇa が同時に主体原理として、ātman と等しく梵と同置されていることに注目すれば、ウパニシャッドにおける梵我同一説が従来考えられていたような認識論的・存在論的な意味で解されてはならないというべきである。ブラーナ説にみられるような生理—心理的な背景を考慮して理解される必要があろう。[12]

1 Śatapatha-Br. X. 3. 3. 6.
2 prāṇa・apāna・vyāna・udāna および samāna の五気息の各々の正確な内容は必ずしも明らかではない。また、常にこの五気息が一群として列挙されているわけではなく、この中の二気息あるいは四気息が挙げられる場合もある。しかし、その際も prāṇa は除かれることはない。
3 Chānd. Up. V. 1. 6～15, Kauṣ. Up. II. 15
4 Bṛhad. Up. I. 5. 2
5 Chānd. Up. III. 13. 1
6 Oldenberg, Die Lehre der Upanishaden und die Anfänge des Buddhismus. S. 21ff.
7 Kauṣītaki Up. III. 2
8 Kauṣītaki Up. III. 5～8
9 Chānd. Up. VII. 15. 4
10 Bṛhad Up. III. 9. 1～9
11 Bṛhad. Up. V. 12. 1
12 ラネードは prāṇa を "bio-psycho-metaphysical conception" として規定している。(Ranade, A constructive study of Upanishadic Philosophy, Poona 1926, p. 65)